

\* 本脚本 供 电 影 爱 好 者 和 日 语 学 习 者 阅 读 学 习 使 用 ， 版 权 属 于 原 作 者

ちひろ  
父 千尋。千尋、もうすぐだよ。

いなか か もの となりまち  
母 やっぱり田舎ねー。買い物は隣町に行くしかなさそうね。

す みやこ  
父 住んで都にするしかないさ。

しょうがっこう ちひろ あたら がっこう  
ほら、あれが小学校だよ。千尋、新しい学校だよ。

けっこう がっこう  
母 結構きれいな学校じゃない。

お  
「しゅしゅ起きあがってあかんべをする千尋。」

まえ ほう  
千尋 前の方がいいもん。

はなしお  
…あつ、あああ！おかあさん、お花萎れてっちゃった！

にぎ みずき だいじょうぶ  
母 あなた、ずーっと握りしめてるんだもの。おうちについたら水切りすれば大丈夫よ。

はじ はなたば わか かな  
千尋 初めてもらった花束が、お別れの花束なんて悲しい…

たんじょうび  
母 あら。この前のお誕生日にバラの花をもらったじゃない？

いっぽん い  
千尋 一本ね、一本じゃ花束って言えないわ。

お  
母 カードが落ちたわ。

まどあ きょう いそが  
窓開けるわよ。もうしゃんとしてちょうだい！今日は忙しいんだから。

## タイトル

みち まちが  
父 あれ？道を間違えたかな？おかしいな…

母 あそこじゃない？ほら。

父 ん？

すみ あお いえ  
母 あの隅の青い家でしょ？

いっぽんした みち き い  
父 あれた。一本下の道に来ちゃったんだな。…このまま行っていけるのかな。

まよ  
母 やめてよ、そうやっていつも迷っちゃうんだから。

父 ちょっとだけ、ねっ。

千尋 あのうちみたいの何？

母 石のほこら。<sup>かみさま</sup>神様のおうちよ

父 おとうさん、大<sup>だいじょうぶ</sup>丈夫？

父 まかせとけ、この<sup>くるま</sup>車は四<sup>よんく</sup>駆だぞ！

千尋 うあっ—

母 千尋、座<sup>すわ</sup>ってなさい。

千尋 あっ、うわっ…わっ、わっ！

うあああああっ！

母 あなた、いいかげんにして！

父 行き止まりだ！<sup>ど</sup>

母 なあに？この<sup>たてもの</sup>建物。

父 門<sup>もん</sup>みたいだね。

母 あなた、戻りましょう、あなた。

千尋？…もう。

父 何だ、モルタル<sup>せい</sup>製<sup>あたら</sup>か。結構新<sup>あたら</sup>しい建物だよ。

千尋 …風<sup>かぜ</sup>を吸<sup>すいこ</sup>込んでる…

母 なあに？

父 ちょっと行ってみない？むこうへ<sup>ぬ</sup>抜けられるんだ。

千尋 ここいやだ。戻<sup>もど</sup>ろうおとうさん！

父 な—んだ。恐<sup>こわ</sup>がりだな千尋は。ねっ、ちょっとだけ。

母 引<sup>ひっこし</sup>越センターのトラックが来ちゃうわよ。

父 平<sup>へいき</sup>気だよ、カギは<sup>かぎ</sup>渡<sup>わた</sup>してあるし、全<sup>ぜんぶ</sup>部<sup>ぶ</sup>やってくれるんだろ？

母 そりゃそうだけど…

千尋 いやだ、わたし行かないよ！

戻ろうよ、おとうさん！

父 おいで、平<sup>へいき</sup>気だよ。

千尋 わたし行かない！

うう…ああっ！

母 千尋は<sup>くるま</sup>車<sup>なか</sup>の中<sup>ま</sup>で待<sup>まち</sup>ってなさい。

千尋 うう…おかあさーん！

まってえーっ！

父 <sup>あしもとき</sup> 足下気をつけな。

母 千尋、そんなにくつつかないで。<sup>ある</sup>歩きにくいわ。

千尋 こどここ？

母 あっ。<sup>き</sup>ほら聞こえる。

千尋 …<sup>でんしゃ おと</sup>電車の音！

母 <sup>あんがいえき ちか</sup>案外駅が近いのかもしれないね。

父 いこう、すぐわかるさ。

千尋 <sup>いえ</sup>こんなとこに家がある…

父 <sup>まちが</sup>やっぱり間違いないな。<sup>ざんがい</sup>テーマパークの残骸だよ、これ。

90年頃にあっちこっちでたくさん計画<sup>けいかく</sup>されてさ。バブルがはじけてみんな潰<sup>つぶ</sup>れちゃったんだ。これもその一つだよ、きっと。

千尋 ええーっ、まだ行くの！？おとうさん、もう帰<sup>かえ</sup>ろうよう！

ねえ——っ！

千尋 おかあさん、あの建物うなってるよ。

母 <sup>かぜな きも</sup>風鳴りでしょ。気持ちいいとこねー、車の中のサンドイッチ持<sup>も</sup>ってくれば良<sup>よ</sup>かった。

父 <sup>かわ つく</sup>川を作ろうとしたんだねー。

ん？なんか匂<sup>にお</sup>わない？

母 え？

父 ほら、うまそうな匂いがする。

母 あら、ほんとね。

父 案外まだやってるのかもしれないよ、ここ。

母 千尋、はやくしなさい。

千尋 まーってー！

父 ふん、ふん…こっちだ。

母 <sup>あき ぜんぶ た ものや</sup>呆れた。これ全部食べ物屋よ。

千尋 <sup>だれ</sup> 誰もいないねー。

父 ン？あそこだ！

おーい、おーい。

はあー。うん、わあ。

こっちこっち。

母 わあー、すごいわねー。

父 すみませーん、どなたかいませんかー？

母 千尋もおいで、おいしそうよ。

父 すいませーん！

母 いいわよ、そのうち来たらお <sup>かねはら</sup>金 払 えばいいんだから。

父 そうだな。そっちにいいやつが…

母 これなんていう <sup>とり</sup>鳥 かしら。…おいしい！千尋、すごくおいしいよ！

千尋 いらない！ねえ帰ろ、お <sup>みせ</sup>店 の <sup>ひと</sup>人 に <sup>おこ</sup>怒 られるよ。

父 大丈夫、お父さんがついてるんだから。カードも <sup>さいふ</sup>財 布 も持ってるし。

母 千尋も食べな。 <sup>ほね</sup>骨 まで <sup>やわ</sup>柔 らかいよ。

父 <sup>からし</sup>辛 子。

母 ありがと。

千尋 おかあさん、おとうさん！

<sup>あきら</sup>「諦 めて <sup>ある</sup>歩 き出 す <sup>だ</sup>千尋。 <sup>あぶらや</sup>油 屋 の <sup>たても</sup>建 物 を <sup>み</sup>見 つける。」

千尋 へんなの。

千尋 電車だ！…？

ハク様 <sup>さま</sup>…！ここへ来てははいけない！すぐ戻れ！

千尋 えっ？

ハク様 <sup>よる</sup>じきに夜になる！その前に早く戻れ！

…もう明かりが入った、急いで！私 <sup>あ</sup>が <sup>はい</sup>時 間 を <sup>いそ</sup>稼 ぐ、 <sup>わたし</sup>川 の <sup>じかん</sup>向 こう へ <sup>かせ</sup>走 れ！ <sup>かわ</sup> <sup>む</sup> <sup>はし</sup>

千尋 なによあいつ…

<sup>あ</sup>「明かりが入ると同時に、 <sup>はい</sup>た く さ ん の <sup>どうじ</sup>影 が <sup>かげ</sup>動 き出 す。 <sup>うご</sup> <sup>だ</sup>」

千尋 ……！おとうさーん！

おとうさん帰ろ、帰ろう、おとうさーん！

「座<sup>ぶた</sup>っていた豚<sup>ふむ</sup>が振り向く。」

千尋 ひいい…っ

「豚<sup>たお</sup>がたたかれて倒れる。」

豚 ブギィィィ！

千尋 うわああーっ！

おとおさーん、おかあさーん！

おかあさーん、ひっ！

ぎゃああーっ！

千尋 ひゃっ！…水<sup>みず</sup>だ！

うそ…夢<sup>ゆめ</sup>だ、夢だ！さめろさめろ、さめろ！

さめてえ…っ…

これはゆめだ、ゆめだ。みんな消<sup>き</sup>えろ、消<sup>き</sup>えろ。きえろ。

あっ…ああっ、透<sup>す</sup>けてる！あ…夢<sup>ゆめ</sup>だ、絶<sup>ぜ</sup>対<sup>たい</sup>だ！

「ふね<sup>ふね</sup> せつがん<sup>せつがん</sup> かすが<sup>かすが</sup> で  
船<sup>ふね</sup>が接<sup>せつ</sup>岸<sup>がん</sup>し、春日<sup>かすが</sup>さまが出てくる。」

千尋 ひっ…ひっ、ぎゃあああーっ！

「千尋<sup>さが</sup>を捜<sup>くら</sup>すハク。暗<sup>やみ</sup>闇<sup>み</sup>にいる千尋<sup>み</sup>を見つ<sup>か</sup>けて肩<sup>かた</sup>を抱<sup>だ</sup>く。」

千尋 っっっ！

ハク様<sup>こわ</sup> 怖<sup>わたし</sup>がるな。私<sup>みかた</sup> はそなたの味<sup>み</sup>方<sup>かた</sup>だ。

千尋 いやっ、やっ！やっっ！

ハク様<sup>くち</sup> 口<sup>あ</sup>を開<sup>あ</sup>けて、これ<sup>はや</sup>を早<sup>はや</sup>く。この世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>の物<sup>た</sup>を食<sup>た</sup>べないとそなたは消<sup>き</sup>えてしまう。

千尋 いやっ！…っ！？

ハク様<sup>か</sup> 大<sup>の</sup>丈夫<sup>か</sup>、食<sup>の</sup>べても豚<sup>か</sup>にはならない。噛<sup>の</sup>んで飲<sup>の</sup>みなさい。

千尋 …ん…んう…んー…っ

ハク様<sup>さわ</sup> もう大<sup>さわ</sup>丈夫<sup>さわ</sup>。触<sup>さわ</sup>ってごらん。

千尋 さわれる…

ハク様 ね？さ、おいで。

千尋 おとうさんとおかあさんは？どこ？豚なんかになってないよね！？

ハク様 <sup>むり</sup>今は無理だけど <sup>かなら</sup>必ず <sup>あ</sup>会えるよ。…！

しず  
静かに！

「ハクが千尋を <sup>かべ</sup>壁に押しつけると、<sup>お</sup>上 <sup>じょうくう</sup>空を湯ば一ぱが <sup>ゆ</sup>飛んでいく。」

ハク様 <sup>さが</sup>そなたを捜しているのだ。<sup>じかん</sup>時間がない、<sup>はし</sup>走ろう！

千尋 あっ…立てない、どうしよう！力が入らない…

ハク様 <sup>お</sup>落ち着いて、<sup>つ</sup>深く <sup>ふか</sup>息を <sup>いき</sup>吸って <sup>す</sup>ごらん… <sup>…</sup>そなたの <sup>うち</sup>内なる <sup>かぜ</sup>風と <sup>みず</sup>水の名において… <sup>な</sup>…と <sup>…と</sup>解き

はな  
放て…

た  
立って！

千尋 あっ、うわっ！

「走り出す二人。」

ハク様 <sup>はし</sup>… <sup>わた</sup>橋を <sup>あいだ</sup>渡る <sup>いき</sup>間、息をしてはいけないよ。

ちよつとでも <sup>す</sup>吸ったり <sup>は</sup>吐いたりすると、<sup>じゅつ</sup>術が <sup>と</sup>解けて <sup>みせ</sup>店の <sup>もの</sup>者に <sup>き</sup>気づかれてしまう。

千尋 こわい…

ハク様 <sup>こころ</sup>心を <sup>しず</sup>鎮めて。

従業員 <sup>はや</sup>いらっしやいませ、お <sup>つ</sup>早いお着きで。いらっしやいませ。いらっしやいませ。

ハク様 <sup>しょう</sup>所用からの <sup>もど</sup>戻りだ。

従業員 へい、お戻りくださいませ。

ハク様 <sup>ふか</sup>深く <sup>す</sup>吸って… <sup>と</sup>止めて。

「カオナシが千尋を見 <sup>みおく</sup>送る。」

湯女 <sup>いらっしやい</sup>、お待ちしてましたよ。

ハク様 しっかり、もう少し。<sup>すこ</sup>

青蛙 ハク様あー。何処へ行っておったー？<sup>どこ い</sup>

千尋 …！ぶはあつ

青蛙 ひっ、人か？

ハク様 …！走れ！

青蛙 …ん？え、え？

あおかえる <sup>じゅつ</sup> に  
「青蛙に術をかけて逃げるハク。」

従業員 ハク様、ハク様！ええい匂わぬか、人が入り込んだぞ！臭いぞ、臭いぞ！<sup>ひと はい こ くさ</sup>

ハク様 勘づかれたな…<sup>かん</sup>

千尋 ごめん、私 息しちやった…

ハク様 いや、千尋はよく頑張った。これからどうするか 離すからよくお聞き。ここには必ず見つかる。<sup>がんば はな き</sup>

私が行って誤魔化すから、そのすきに千尋はここを抜け出して…<sup>ごまか ぬ だ</sup>

千尋 いや！行かないで、ここにいて、お願い！<sup>ねが</sup>

ハク様 この世界で生き延びるためにはそうするしかないんだ。ご両親を助けるためにも。<sup>せかい い の りょうしん たす</sup>

千尋 やっぱり豚になったの夢じゃないんだ…<sup>ぶた</sup>

ハク様 じっとして…

さわ おさ うら ど で そと かいだん いちばんした  
騒ぎが収まったら、裏のぐり戸から出られる。外の階段を一番下まで下りるんだ。そこ

にボイラー室の入口がある。火を焚くところだ。<sup>しつ いりぐち ひ た</sup>

なか かまじい ひと あ  
中に釜爺という人がいるから、釜爺に会うんだ。

千尋 釜爺？

ハク様 その人にここで働きたいと頼むんだ。断られても、粘るんだよ。<sup>はたら たの ことわ ねば</sup>

ここでは仕事を持たない者は、湯婆婆に動物にされてしまう。<sup>しごと も もの ゆばーば どうぶつ</sup>

千尋 湯婆婆…って？

ハク様 会えばすぐに分かる。ここを支配している魔女だ。嫌だとか、帰りたいとか言わせるよ<sup>あ わ しはい まじよ いや かえ い</sup>

うに仕向けてくるけど、働きたいとだけ言うんだ。辛くても、耐えて機会を待つんだよ。そうす<sup>しむ はたら い つら た た ま</sup>

れば、湯婆婆には手は出せない。  
千尋 うん…

従業員 ハク様あー、ハク様ー、どちらにおいでですかー？

ハク様 いかなきゃ。忘れないで、私は千尋の味方だからね。

千尋 どうして私の名を知ってるの？

ハク様 そなたの小さいときから知っている。私の名は——ハクだ。

ハク様 ハクはここにいるぞ。

従業員 ハク様、湯婆婆さまが…

ハク様 分かっている。そのことで外へ出ていた。

かいだん むか おそ おそ ぶ だ いちだんすべ お  
「階段へ向う千尋。恐る恐る踏み出し、一段滑り落ちる。」

千尋 いやっ！

はっ、はあっ…

いちだんふ だ かいだん こわ はし だ  
「もう一段踏み出すと階段が壊れ、はずみで走り出す。」

千尋 わ…ついやあああ——っ！やあああああああ—！

お しつ  
「なんとか下まで降り、そろそろとボイラー室へむかう。」

かまじい あと あつ かま さわ  
「ボイラー室で釜爺をみて後ずさりし、熱い釜に触ってしまう。」

千尋 あっつ…！

おと  
「カンカンカンカン(ハンマーの音)」

千尋 あの…。すみません。

かまじい  
あ、あの…あの、釜爺さんですか？

釜爺 ん？…ん、んん——？

い はたら  
千尋 …あの、ハクという人に言われてきました。ここで働かせてください！



よ りん おと  
「リンリン(呼び鈴の音)」

釜爺 ええい、こんな<sup>いちど</sup>に一度に…  
チビども、仕事だー！

「カンカンカンカンカンカン」

釜爺 わしゃあ、釜<sup>かま</sup>爺<sup>じ</sup>だ。風呂釜<sup>ふろかま</sup>にこき<sup>つか</sup>使われとるじじいだ。  
チビども、はやくせんか！  
千尋 あの、ここで働かせてください！

釜爺 ええい、手<sup>て</sup>は足<sup>た</sup>りとする。そこら中ススだらけだからな。いくらでも代わりはおるわい。

千尋 あっ、ごめんなさい。  
あっ、ちょっと待って。  
釜爺 じゃまじゃま！

千尋 …あっ。

おも つぶ せきたん も あ に かえ  
「重<sup>おも</sup>さで潰<sup>つぶ</sup>れたススワタリの石<sup>せきたん</sup>炭<sup>も</sup>を持ち上げる千尋。ススワタリは逃げ<sup>に</sup>帰<sup>かえ</sup>ってゆく。」

千尋 あっ、どうするのこれ？  
ここにおいといていいの？  
釜爺 手<sup>て</sup>え出すならしまいまでやれ！  
千尋 えっ？…

せきたん かま はこ まね  
「石<sup>せきたん</sup>炭<sup>かま</sup>を釜<sup>はこ</sup>に運<sup>まね</sup>ぶと、ススワタリみんなが潰れた真似をしだす。」  
「カンカンカンカン」

釜爺 こらあー、チビどもー！ただのススにもどりにてえのか！？

あんたも気まぐれに手<sup>き</sup>え出して、人<sup>て</sup>の仕事<sup>だ</sup>を取<sup>ひと</sup>っちならね。働<sup>しごと</sup>かなきゃな、こいつらの魔法<sup>はたら</sup>  
<sup>まほう</sup>  
は消えちまうんだ。

ここにあんたの仕事<sup>しごと</sup>はねえ、他<sup>ほか</sup>をあ<sup>あ</sup>たってくれ。  
…なんだおまえたち、文句<sup>もんく</sup>があるのか？仕事<sup>しごと</sup>しろ仕事！

リン メシだよー。なあんだまたケンカしてんのー？  
よしなさいよもうー。うつわは？ちゃんと出しといてって言うてるのに。

釜爺 おお…メシだー、休憩きゆうけいー！

リン うわ！？

にんげん 人間うえ おおさわがいちゃ！…やばいよ、さつき上で大騒ぎしてたんだよ！？

釜爺 わしの…孫まごだ。

リン まごオ？！

釜爺 働きたいと言うんだが、ここは手が足りとる。おめえ、湯婆婆ゆばーばンとこへ連れてってくれねえ  
か？後あとは自分じぶんでやるだろ。

リン やなこった！あたいが殺ころされちまうよ！

釜爺 これでどうだ？イモリの黒焼きくろや。じょうほんだぞ。

どのみち働くには湯婆婆けいやくと契約うんせにやならん。自分で行って、運ためを試しな。

リン …チェッ！そこの子、ついて来な！

千尋 あっ。

リン …あんたネエ、はいとかお世話せわになりますとか言えないの！？

千尋 あっ、はいっ。

リン どんくさいね。はやくおいで。

くつ も くつした  
靴くつなんか持ってどうすんのさ、靴下くつしたも！

千尋 はいっ。

リン あんた。釜爺れいいいにお礼せわ言ったの？世話せわになったんだろ？

千尋 あっ、うっ！…ありがとうございました。

釜爺 グッドラック！

リン 湯婆婆は建物のてっぺんのその奥おくにいるんだ。

早くしろよオ。

千尋 あっ。

リン 鼻はながなくなるよ。

千尋 っ…

リン <sup>いっかいの つ</sup> もう一回 乗り継ぐからね。  
千尋 はい。

リン いくよ。  
…い、いらっしやいませ。

お <sup>きゃく</sup>客 <sup>うえ</sup>さま、このエレベーターは上へは <sup>まい</sup>参りません。他 <sup>ほか</sup>をお探 <sup>さが</sup>し <sup>くだ</sup>下さい。

千尋 ついてくるよ。  
リン きよろきよろすんじゃないよ。

蛙男 <sup>とうちゃく</sup> 到着 でございます。  
みぎて <sup>ざしき</sup> 右手のお座敷 でございます。  
?…リン。  
リン はい。(ドン!)  
千尋 うわっ!

蛙男 <sup>にんげん</sup> なんか匂わぬか? 人間 だ、おまえ人間くさいぞ。  
リン そーですかあー?

蛙男 <sup>かく</sup> 匂う匂う、うまそうな匂いだ。おまえなんか <sup>しょうじき</sup> 隠 <sup>もう</sup>しておるな? 正 直に申せ!  
リン この匂いでしょ。  
蛙男 黒焼き! …くれえ一つ!

リン やなこった。お姉さま <sup>がた たの</sup>方に頼まれてんだよ。

蛙男 <sup>あしいっぽん</sup> 頼む、ちょっとだけ、せめて足一本!  
リン 上へ行くお客さまー。レバーをお引き下さーい。

「『二天』につくが、『天』まで千尋を連れて行くおしらさま。」

お <sup>おく</sup>く <sup>あ</sup>あ  
「奥のドアを開けようとする千尋。」

湯婆婆 …ノックもしないのかい! ?  
千尋 やっ! ?

湯婆婆 <sup>むすめ</sup> ま、みっともない 娘 が来たもんだね。  
さあ、おいで。…おいで一な~。  
千尋 わっ! わ…っ!  
いったあ~…

あたま よ  
「頭 が寄ってくる。」

千尋 ひっ、うわあ、わあっ…わっ！  
湯婆婆 うるさいね、静かにしておくれ。  
千尋 あのー…ここで働かせてください！

まほう  
「魔法 で口チャックされる千尋。」

ばか  
湯婆婆 馬鹿なおしゃべりはやめとくれ。そんなひよろひよろに何が出来るのさ。

にんげん く やおよろず かみさまたち つか く  
ここはね、人 間の来るところじゃないんだ。八百万の神 様 達が 疲 れをいやしに来るお  
ゆや  
湯屋なんだよ。

おや く ち とうぜん むく  
それなのにおまえの 親 はなんだい？お客さまの食べ物を豚のように食い散らして。当 然 の報  
いさ。

もと せかい もど  
おまえも元の世界 には戻れないよ。

こぶた せきたん て  
…子豚にしてやろう。ええ？石 炭、という手もあるね。

ふる … よ だれ しんせつ せわ  
へへへへっ、震 えているね。…でもまあ、良くここまでやってきたよ。誰 かが親 切 に世話を  
や  
焼いたんだね。

誉めてやらなきゃ。誰だい、それは？教えておくれな…

千尋 …あっ。ここで働かせてください！

湯婆婆 まアだそれを言うのかい！

千尋 ここで働きたいんです！

湯婆婆 だア———まア———れエ———！

湯婆婆 なんてあたしがおまえを <sup>やと</sup>雇 わなきゃならないんだい！？見るからにグズで！ <sup>み</sup>甘 ったれ <sup>あま</sup>

<sup>な むし</sup>で！泣き虫で！ <sup>あたま</sup>頭 の <sup>わる</sup>悪い <sup>こむすめ</sup>小 娘 に、 <sup>しごと</sup>仕事なんかあるもんかね！

<sup>ことわ</sup>お 断 りだね。これ以上 <sup>いじょうこくつぶ</sup>穀 潰 しを <sup>ふ</sup>増 やして <sup>しごと</sup>どうしようっていうんだい！

<sup>いちばん</sup>それとも… 一 番 <sup>しごと</sup>つら——— <sup>し</sup>いきつ———い <sup>し</sup>仕事を死ぬまでやらせてやろうかあ…？

湯婆婆 …ハッ！？

坊 あ————ん、あ——ん、ああああ————

湯婆婆 やめなさいどうしたの坊や、今すぐ行くからいい子でいなさいね…まだいたのかい、さつさと出て行きな！

千尋 ここで働きたいんです！

湯婆婆 <sup>こえ</sup>大きな<sup>だ</sup>声を出<sup>…</sup>すんじゃない…うっ！あー、ちよつと<sup>ま</sup>待ちなさい、ね、ねえ〜。いい子だから、ほおらほら〜。

千尋 働かせてください！

湯婆婆 わかったから静かにしておくれ！

おおおお〜よ〜しよし〜…

<sup>かみ</sup>紙と<sup>ほう</sup>ペンが<sup>と</sup>千尋の方へ飛んでくる。」

湯婆婆 <sup>けいやくしょ</sup>契約書だよ。そこに<sup>なまえ</sup>名前を書きな。<sup>か</sup>働<sup>はたら</sup>かせてやる。その代わり<sup>か</sup>嫌<sup>いや</sup>だとか、<sup>かえ</sup>帰<sup>かえ</sup>りた<sup>い</sup>いとか言<sup>い</sup>った<sup>こぶた</sup>らすぐ子豚にしてやるからね。

千尋 あの、名前ってここですか？

湯婆婆 そうだよもうぐずぐずしないでさつさと書きな！

まったく…つまらない<sup>ちか</sup>誓<sup>ちか</sup>いをたてちまったもんだよ。働きたい者には仕事をやるだなんて…書いたかい？

千尋 はい…あつ。

湯婆婆 フン。千尋というのかい？

千尋 はい。

湯婆婆 <sup>ぜいたく</sup>贅<sup>な</sup>沢な名だねえ。

今からおまえの名前は千だ。いいかい、<sup>せん</sup>千<sup>へんじ</sup>だよ。分<sup>せん</sup>かったら返<sup>せん</sup>事をするんだ、千！

<sup>せん</sup>千<sup>せん</sup> は、はいっ！

ハク様 お呼びですか。

湯婆婆 今日からその子が働くよ。世話をしな。

ハク様 はい。…名はなんという？

千 え？ち、…あ、千です。

ハク様 では千、来なさい。

千 ハク。あの…

ハク様 <sup>むだくち</sup>無駄口をきくな。私のことは、ハク様と呼べ。

千 …っ

父役 いくら湯婆婆さまのおっしゃりでも、それは…

兄役 <sup>にんげん こま</sup>人間は困ります。

ハク様 <sup>すで</sup>既に契約されたのだ。

父役 なんと…

千 よろしく願います。

湯女 あたしらのところには<sup>よ</sup>寄せないどくれ。

湯女 <sup>ひとくさ</sup>人臭くてかなわんわい。

ハク様 <sup>もの みつか た</sup>この物を三日も食べれば<sup>にお き</sup>匂いは消えよう。それで<sup>つか もの</sup>使い物にならなければ、<sup>や</sup>焼こう  
<sup>に す</sup>が煮ようが好きにするがいい。

しごと もど <sup>どこ</sup>仕事に戻れ！リンは何処だ。

リン ええっ、あたいに<sup>お</sup>押しつけんのかよう。

ハク様 <sup>てした</sup>手下をほしがっていたな。

父役 そうそう、リンが<sup>てきやく</sup>適役だぞ。

リン えっ。

ハク様 千、行け。

千 はいっ。

リン やってらんねえよ！<sup>う あ</sup>埋め合わせはしてもらうからね！

兄役 はよいけ。

リン <sup>こ</sup>フン！…来いよ。

リン …おまえ、うまくやったなあ！

千 えっ？

リン おまえトロイからさ、<sup>しんぱい</sup>心配してたんだ。<sup>ゆだん</sup>油断するなよ、<sup>き</sup>わかんないことはおれに聞け。  
な？

千 うん。

リン …ん？どうした？

千 <sup>あし</sup>足がふらふらするの。

リン ここがおれたちの部屋だよ。食<sup>へ</sup>って寝<sup>く</sup>りや元<sup>ね</sup>気<sup>げん</sup>になるさ。

はらが じぶん あら はかま  
腹<sup>は</sup>掛<sup>か</sup>け。自分<sup>じぶん</sup>で洗<sup>あら</sup>うんだよ。…袴<sup>はかま</sup>。チビだからなあ…。でかいな。

千 リンさん、あの…

リン なに？

千 ここにハク<sup>ふたり</sup>っていうひと二人<sup>ふたり</sup>いるの？

リン 二人<sup>ふたり</sup>い？あんなの二人<sup>ふたり</sup>もいたらたま<sup>たま</sup>ないよ。…だめか。

あいつは湯<sup>て</sup>婆<sup>さき</sup>の手<sup>て</sup>先<sup>さき</sup>だから気<sup>き</sup>をつけな。

千 …んっ…ん…

リン …おかしいな…あああ、あ<sup>あ</sup>ったあ<sup>あ</sup>った。ん？

おい、どうしたんだよ？し<sup>し</sup>っかりしろよう。

女<sup>め</sup> うるさいなー。なんだよリン？

リン きも わる しんい  
気<sup>き</sup>持<sup>も</sup>ち 悪<sup>わる</sup>いんだって。新<sup>しん</sup>入<sup>い</sup>りだよ。

「湯<sup>と</sup>婆<sup>と</sup>が鳥<sup>み</sup>にな<sup>お</sup>って飛<sup>と</sup>んでい<sup>く</sup>。見<sup>み</sup>送<sup>お</sup>くハク。」

「寝<sup>ね</sup>てい<sup>る</sup> 千<sup>せん</sup> のもとへ、ハクが 忍<sup>しの</sup>んでくる。」

ハク様 はし ところ あ  
橋<sup>はし</sup> の 所<sup>ところ</sup> へおいで。お父<sup>お</sup>さんとお母<sup>お</sup>さんに会<sup>あ</sup>わせてあげる。

へや ぬ だ せん  
「部<sup>へ</sup>屋<sup>や</sup>を抜<sup>ぬ</sup>け出<sup>だ</sup>す 千<sup>せん</sup>。」

くつ  
千 靴<sup>くつ</sup>がない。

…あ。ありが<sup>あ</sup>とう。

「ススワタリ<sup>て</sup>に手<sup>て</sup>を振<sup>ふ</sup>る千<sup>せん</sup>。」

「橋<sup>はし</sup>の上<sup>の上</sup>でカオナシ<sup>カオナシ</sup>に会<sup>あ</sup>う。」

ハク様 おいで。

はな あいだ とお ちくしゃ  
「花<sup>はな</sup>の 間<sup>あいだ</sup> を通<sup>とお</sup>り畜<sup>ちく</sup>舎<sup>しゃ</sup>へ。」

千 …おとうさんおかあさん、私<sup>わたし</sup>よ！…せ、千<sup>せん</sup>よ！おかあさん、おとうさん！

びょうき  
病 気かな、ケガしてる？

ハク様 いや。おなかが一杯で寝ているんだよ。人間だったことは今は忘れてる。

千 うっ…くっ…おとうさんおかあさん、きつと助けてあげるから、あんまり太っちゃだめだよ、食べられちゃうからね！

かきね した せん ふく わた  
「垣根の下でうずくまる千。ハクが服を渡す。」

ハク様 これは隠しておきな。

千 あっ！…捨てられたかと思ってた。

ハク様 帰るときにいるだろう？

千 これ、お別れにもらったカード。ちひろ？…千尋って…私の名だわ！

ハク様 湯婆婆は相手の名を奪って支配するんだ。いつもは千でいて、本当の名前はしっかり隠しておくんだよ。

千 私、もう取られかけてた。千になりかけてたもん。

ハク様 名を奪われると、帰り道が分からなくなるんだよ。私はどうしても思い出せないんだ。

千 ハクの本当の名前？

ハク様 でも不思議だね。千尋のことは覚えていた。

お食べ、ご飯を食べてなかったろ？

千 食べたくない…

ハク様 千尋の元気が出るように呪いをかけて作ったんだ。お食べ。

千 …ん…ん、んっ……うわあああ——、わあああ——、あああ——ん…

ハク様 つらかったろう。さ、お食べ。

千 ひっく…うああ——ん…

ハク様 一人で戻れるね？

千 うん。ハクありがとう、私がんばるね。

ハク様 うん。

かえ ぎわ そら のぼ しろ りゅう み  
「帰り際、空に昇る白い竜を見つける。」



千 わあっ。

かまじい みず の お ね せん み ざぶとん か  
「釜 爺 が 水 を 飲みに 起き、寝ている 千 を 見つける。座布団を掛けてやる。」

「湯婆婆が戻ってくる。」

リン どこ行ってたんだよ。心配してたんだぞ。

千 ごめんなさい。

なふだ か てまど せん  
「名 札 を 掛けるのに 手間取る 千 。」

湯女 じゃまだねえ。

リン 千、もっと <sup>ちから</sup>力 はいんないの？

兄役 リンと千、今日から大 <sup>おおゆばん</sup>湯 番だ。

リン ええーっ、あれは <sup>かえる</sup>蛙 の仕事だろ！

兄役 <sup>うわやく めいれい ほねみ お</sup>上 役 の 命 令 だ。骨 身 を 惜しむなよ。

みず す く せん そと た  
「水 を 捨てに来る 千 。外 に 立っているカオナシを見つかる。」

千 あの、そこ <sup>ぬ</sup>濡れませんか？

リン 千、早くしろよ！

千 はーい。…ここ、開けときますね。

湯女 <sup>おおゆ</sup>リン、大湯だって？

リン ほっとけ！

リン ひでえ、ずーっと洗ってないぞ。

ころ  
「転ぶ千。」

千 うわっ！…あーっ。

リン この風呂はさ、汚しのお客専門なんだよ。うー、こびりついてと取れやしねえ。

兄役 リン、千。一番客が来ちまうぞ。

リン は——い今すぐ！チッ、下いびりしやがって。

いっかいくすりゆい  
一回薬湯入れなきゃダメだ。千、番台行って札もらってきな。

千 札？…うわっ！

リン 薬湯の札だよ！

千 はあーい。…リンさん、番台ってなに？

湯婆婆 ん？…なんだろうね。なんか来たね。

あめ まぎ  
雨に紛れてろくでもないものが紛れ込んだかな？

まち すす  
「街を進んでくるオクサレさま。」

番台蛙 そんなもったいないことが出来るか！…おはようございます！良くお休みになられましたか！

かすがさま  
湯女 春日様。

番台蛙 はい、硫黄の上！…いつまでいたって同じだ、戻れ戻れ！手でこすればいいんだ！

おはようございます！…手を使え手を！

千 でも、あの、薬湯じゃないとダメだそうです。

番台蛙 わからんやつだな…あっ、ヨモギ湯ですね。どーぞごゆっくり…

千 あっ…

はいご えしゃく  
「背後にカオナシを見つけて会釈する千。」

番台蛙 んん？

「リリリリリ」

番台蛙 はい番台です！…あっ、…うわっ！？

千 あっ！ありがとうございます！

番台蛙 あー、違う！こら待て、おい！

湯婆婆 どしたんだい！？

番台蛙 い、いえ、なんでもありません。

湯婆婆 なにか入り込んでよ。

番台蛙 人間ですか。

湯婆婆 それを調<sup>しら</sup>べるんだ。今日<sup>きょう</sup>はハクがないからね。

リン ヘえーずいぶんいいのくれたじゃん。

これがさ、釜爺<sup>こ</sup>の<sup>こ</sup>とこへ行くんだ。混<sup>こ</sup>んでないからすぐ来るよきっと。

これを引<sup>ひ</sup>けばお湯<sup>ゆ</sup>が出る。や<sup>で</sup>ってみな。

千 うわっ！…

リン 千てほんとドジな一。

千 うわ、す<sup>いろ</sup>ごい色…

リン こいつにはさ、ミミズの干物<sup>ひもの</sup>が<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>ってんだ。こんだけ濁<sup>にご</sup>ってりゃこすらなくても同<sup>おな</sup>じだな。

いっぱいになったらもう一<sup>いっかい</sup>回<sup>ひ</sup>引<sup>ひ</sup>きな、止<sup>と</sup>まるから。もう放<sup>はな</sup>して大<sup>だい</sup>丈<sup>じょう</sup>夫<sup>ぶ</sup>だよ。おれ朝飯<sup>あさめし</sup>取<sup>と</sup>ってくんな！

千 はあーい。…あっ。

「カオナシを見<sup>み</sup>つける。風呂<sup>ふろ</sup>の縁<sup>えん</sup>から落<sup>お</sup>ちる千。」

千 うわっ！…いったい…った…

あの、お風呂まだなんです。

わ…こんなにたくさん…

えっ、私にくれるの？

カオナシ あ、あ、…

千 あの…それ、そんなにいらない。

カオナシ あ、…

千 だめよ。ひとつでいいの。

カオナシ あ…

千 え…あっ！

「釜から水があふれる。」

千 うわあっ！

おくさま  
父役 奥様！

湯婆婆 <sup>かみ</sup>クサレ神 だって！？

父役 <sup>とくだい</sup>それも特大のオクサレさまです！

従業員 <sup>はし む</sup>まっすぐ橋へ向かってきます！

従業員達 お帰り下さい、お帰り下さい！

青蛙 <sup>かえ くだ</sup>お帰り下さい、<sup>ひ と くだ</sup>お引き取り下さい、<sup>かえ くだ</sup>お帰り下さい！  
うっ…くっさいい～…！

湯婆婆 うう～ん…おかしいね。クサレ神なんかの気配じゃなかったんだが…

来ちまったものは仕方ない。<sup>むか</sup>お迎えしな！  
こうなったら出来るだけはやく引き取ってもらうしかないよ！

兄役 リンと千、湯婆婆様がお呼びだ。

千 あ、はいっ！

湯婆婆 <sup>はつしごと</sup>いいかい、おまえの初仕事だ。これから来るお客を大湯で世話するんだよ。

千 …あの～…

湯婆婆 <sup>よん ご い</sup>四の五の言うと、<sup>せきたん</sup>石炭にしちまうよ。わかったね！

父役 み、見えました…ウツ…

湯婆婆・千 ウウツ…！

湯婆婆 …おやめ！お客さんに失礼だよ！  
<sup>しつれい</sup>

が・が…ヨク オコシクダしゃいマシタ…

え？あ オカネ…千！千！<sup>はや う とり</sup>早くお受け取りな！

千 は、はいっ！

(ベチャツ)

千 うう…！

湯婆婆 ナニ してるんだい…！ハヤク <sup>あんない</sup>ご案内しな！

千 ど どうぞ …

リン セー——ン！

うえっ…くっせえ…あつ、メシが！

湯婆婆 まど あ ぜんぶ  
窓をお開け！全部だよ！

おおゆ と こ うなが  
「大湯に飛び込み、千に何かを促すオクサレさま。」

千 えっ？あ、…ちょっと待って！

「上から見ている湯婆婆と父役。」

湯婆婆 きたな  
フッフフ、汚いね。

父役 わらごと  
笑い事ではありません。

湯婆婆 あの子どうするかね。

…ほお、たゆき  
足し湯をする気だよ。

父役 きたな て かべ さわ  
ああああ、汚い手で壁に触りおって！

千 あっ…あっ！

ふださ お ほか と おく  
「札を下げようとして落とす千。他の札を取って釜爺に送る。」

湯婆婆 んん？千に新しい札あげたのかい？

父役 まさかそんなもったいない…

千 わっ！

ゆ ひも ひ  
「湯の紐を引きながら落ちる千。ヘドロにはまる。」

父役 こうか くすりゆ  
あああ一つ、あんな高価な薬湯を！

「オクサレさまにひばだ  
引っ張り出される千。何かに手を触れる。」

千 …？あっ？

リン セー——ン！千どこだ！

千 リンさん！

リン だいじょぶかあ！釜爺にありったけのお湯出すように頼んできた！<sup>さいこう</sup>最高の薬湯おごってくれるって！

千 ありがとう！あの、ここにトゲみたいのが刺さってるの！

リン トゲ——？

千 <sup>ふか</sup>深くて取れないの！

湯婆婆 トゲ？トゲだって？…ううーん…

した <sup>にんずう あつ</sup>下に人数を集めな！

父役 ええっ？

湯婆婆 <sup>いそ</sup>急ぎな！

千とリン、そのお方はオクサレ神ではないぞ！

このロープをお使<sup>づか</sup>い！

千 はいっ！

リン しっかり持ってな！

千 はいっ！

湯婆婆 ぐずぐずするんじゃないよ！<sup>おんな ちから あ</sup>女も力を合わせるんだ！

千 <sup>むす</sup>結びました！

湯婆婆 ん——湯屋一同、心<sup>ゆ やいちどう ころ</sup>をこめて！エイヤ——ソ——レ——  
一同 そ——れ、そ——れ！

そ——れ、そ——れ！

千 <sup>じてんしゃ</sup>自転車？

湯婆婆 やはり！さあ、きばるんだよ！

「オクサレさまからたくさんのごみが出てくる。」

河の主 はア——…

千 うっわっ…わあっ！

みず <sup>なが</sup>なが <sup>つつ</sup>つつ  
「水の流<sup>なが</sup>れに包<sup>つつ</sup>まれる千。」

リン セー——ン！だいじょぶかあ！？

河の主 …<sup>よ かな</sup>佳き哉…

千 あっ…

「千の手に<sup>のこ だんご</sup>残る団子。」

湯婆婆 んん…？

従業員 <sup>さきん</sup>砂金だ！

砂金だ！わあーっ！

湯婆婆 静かにおし！お客さまがまだおいでなんだよ！

千！お客さまの<sup>じゃま お</sup>邪魔だ、そこを下りな！

おおど あ <sup>かえ</sup>お帰りだ！  
大戸を開けな！

河の主 あははははははははは…

神様達 やんや——やんや——！

湯婆婆 セーン！よくやったね、大<sup>おお</sup>もうけだよ！

ありやあ名のある河<sup>かわ めし</sup>の主だよ～。みんなも千を見<sup>みならい</sup>習いな！今日は一本<sup>いっぽんつ</sup>付けるからね。

みんな おお——！

湯婆婆 さ、とった砂金を全部だしな！

みんな ええ——っ！そりゃねえやな…

「仕事が終わって、部屋の前でくつろぐ千。」

リン 食う？かっぱらってきた。

千 ありがとう。

リン あー、やれやれ…

千 …ハク、いなかったねー。

リン まあたハクかよー。…あいつ<sup>ときどき</sup>時々いなくなるんだよ。噂<sup>うわさ</sup>じゃさあ、湯婆婆にやばいことやらされてんだって。

千 そう…

女 リン、消すよー。

リン ああ。

千 街がある…海みたい。

リン あたりまえじゃん、雨が降りゃ海くらいできるよ。  
おれいつかあの街に行くんだ。こんなとこ絶対にやめてやる。

「ふと、団子をかじってみる千。」

千 ヲツ…ううっ…

リン ん？…どうした？

「にんき おおゆ しの こ あおかえる  
人気のない大湯に忍び込む青蛙。」

青蛙 ん？んん——っ…

…砂金だ！…あ。おぬし！何者だ。客人ではないな。そこに入っちはいけないのだぞ！

…おっ！おっ、金だ金だ！こ、これをわしにくれるのか？

カオナシ あ、あ…

青蛙 き、金を出せるのか？

カオナシ あ、あ、…

青蛙 くれ〜っ！

青蛙 わあっ！

「カオナシにひとのみにされる青蛙。」

兄役 誰ぞそこにおるのか？ しょうとうじかん 消灯時間はとうに過ぎたぞ。

うっ…？

カオナシ あにえき 兄役どの、おれは へら へら 腹が減った。腹ぺこだ！

兄役 そ、その声は…

カオナシ まえきん 前金だ、受け取れ。わしは きゃく 客だぞ、ふろ 風呂にも はい 入るぞ。みんなを起こせえっ！

千 お父さんお母さん、河の神様からもらったお団子だよ。これを食べれば人間に戻れるよ、きつと！



「たくさんの豚が<sup>いっせい</sup>一斉にこっちを見る。」

千 お父さんお母さんどこ？おとうさーん…

千 ハッ！…やな夢。  
…リン？…誰もいない…

千 わあっ、本当に海になってる！  
ここからお父さんたちのとこ見えるんだ。  
釜爺がもう火を焚<sup>ひ た</sup>いてる。そんなに寝ちゃったのかな…

兄役 お客さまがお待ちだ、もっと早くできんのか！？  
父役 <sup>なまに</sup>生煮えでもなんでもいい、どんどんお持ちしろ！  
リン セーン！  
千 リンさん。

リン <sup>いまお</sup>今起こしに行こうと思<sup>い</sup>ったんだ。見<sup>おも</sup>な！  
ほんもの <sup>きん</sup>金の<sup>きまえ</sup>だ、もらったんだ。すげー<sup>きまえ</sup>一気前のいい客が来たんだ。

「大湯に浸<sup>つ</sup>かってごちそうを食べまくるカオナシ。」

カオナシ おれは腹ペこだ。ぜーんぶ持ってこい！

千 そのお客さんって…  
リン <sup>こ</sup>千も来い。湯婆婆まだ寝てるからチャンスだぞ。  
千 あたし釜爺のとこ行かなきゃ。

リン 今 釜爺のとこ行かない方がいいぞ、たたき起こされてもの<sup>ふきげん</sup>すごい不機嫌だから！  
女たち リン、もいっかい行こ！  
リン ああ！

「部屋に戻る千。」

千 …おとうさんとおかあさん、分からなかったらどうしよう。おとうさんあんまり太ってたらやだなー。

はあ…

うみ なか しろ りゅう しきかみ お  
「海の中を白い竜が式神に追いかけていく。」

千 ん？…ああっ！

橋のところで見た竜だ！こっちに来る！

なんだろう、鳥じゃない！…ひゃっ！

ハクーっ、しっかりっ！こっちよっ！…ハク！？

ハクーっ！

へや りゅう と こ まど し しきがみ と  
「部屋に竜が飛び込む。窓を閉めようとする千に、式神が飛びかかる。」

千 うわあっ！わあああっ！…あっ？

…ただの紙だ…

千 ハクね、ハクでしょう？

ケガしてるの？あの紙の鳥は行ってしまったよ。もう大丈夫だよ。…わっ！

湯婆婆の<sup>し</sup>とこへ行くんだ。どうしよう、ハクが死んじゃう！

お はし だ かた は つ  
「竜を追って走り出す千の肩に式神が張り付く。」

兄役 そーれっ、さーてはこの世に極<sup>よ きわ</sup>まれる♪お大<sup>だいじん</sup>尽さまのおなりだよ♪そーれっ  
みんな いらっしやいませ！

兄役 それおねだり♪あ、おねだり♪おねだり♪

さわ か  
「騒ぎの中をエレベータへ駆けていく千。」

蛙男 おっ…と。こら、何をする。

千 上へ行くんです。

蛙男 だめ だめ ち  
駄目だ駄目だ。…ん？あっ！血だ！

千 あっ…

兄役 どけどけ！お客さまのお<sup>とお</sup>通りだ！

千 あ、あのときはありがとうございます。

兄役 何をしてる、早うど…うっ！？

カオナシ あ、あ、あ…

「千に両手<sup>りょうて</sup>いっぱい<sup>きん さ だ</sup>の金を差し出す。」

カオナシ え、え、…

千 …欲<sup>ほ</sup>しくない。いら<sup>ほ</sup>ない！

カオナシ え、え…

千 私<sup>いそが</sup>忙<sup>しつれい</sup>しいので、失礼<sup>しつれい</sup>します！

「こぼした金<sup>むら</sup>に群<sup>ぐんしゅう</sup>がる群<sup>ぬ</sup>衆<sup>ぬ</sup>をすり抜けて千が出ていく。」

兄役 ええい、静<sup>しず</sup>まれ！ 静<sup>しず</sup>まらんか！ 下<sup>さ</sup>がれ下<sup>さ</sup>がれ！

これは、とんだご無<sup>ぶれい</sup>礼<sup>いた</sup>を致<sup>いた</sup>しました。なにぶん新<sup>しんまい</sup>米<sup>にんげん</sup>の人間<sup>こむすめ</sup>の小<sup>こ</sup>娘<sup>むすめ</sup>でございまして…

カオナシ …おまえ、何<sup>なぜ</sup>故<sup>わら</sup>笑<sup>わら</sup>う。笑<sup>わら</sup>ったな。

兄役 ええっ、めっそもない！

兄役・湯女 わっ、わっ、わああっ！

まるの  
「丸<sup>まる</sup>呑みにされる兄役と湯女。皆がパニックで散っていく。」「窓からパイプづたいにはしごへ行こ  
うとする千。走り出すと、パイプが外<sup>はず</sup>れて崩<sup>くず</sup>れていく。」

千 わっ、わっ、わっ、わあっ！

「かろうじてはしごに飛びつく千。はしごを登<sup>のぼ</sup>り出<sup>だ</sup>す。」

千 はあっ、はあっ…あっ！ 湯婆婆！

うっ、くっ…くっ！くっ…ああっ！

まど お あ <sup>せん</sup> 式<sup>しき</sup>神<sup>かみ</sup>がカギ<sup>かぎ</sup>を外<sup>はず</sup>して中<sup>なか</sup>に落<sup>お</sup>ちる。坊<sup>ぼう</sup>の部<sup>お</sup>屋<sup>へ</sup>へ。」

湯婆婆 <sup>まった</sup>全<sup>ま</sup>くなんてことだろねえ。

千 ！

湯婆婆 そいつの正<sup>しょうたい</sup>体はカオナシだよ。そう、カオナシ！

よく  
欲にかられてとんでもない客を引き入れたもんだよ。あたしが行くまでよけいなことをすんじやないよ！

…あああ～、敷<sup>しきもの</sup>物を汚<sup>よご</sup>しちまって。おまえたち、ハクを片<sup>かた</sup>づけな！

千 はっ！

湯婆婆 もうその子は使いもんにならないよ！

千 あっ…あ、あ、あ…

「クッションの中に隠れる千。湯婆婆が来てクッションを探る。」

湯婆婆 ばあ～。

坊 んん——、ああ——ああ——

湯婆婆 ぼう  
もう坊はまたベッドで寝ないで～。

坊 あ…あああ——ん、ああ——ん…

湯婆婆 ああああごめんごめん、いい子でおねんねしてたのにねえ。ばあばはまだお仕事があるの。

(ブチュ)

いいこでおねんねしててねえ～。

千 …あっ！…うう痛い離してっ！あっ、助けてくれてありがとう、私<sup>いそ</sup>急いで行かなくちゃならないの、離してくれる？

坊 おまえ病気うつしにきたんだな。

千 えっ？

坊 おんもにはわるいばいきんしかいないんだぞ。

千 私、人間よ。この世界じゃちょっと珍<sup>めづら</sup>しいかもしれないけど。

坊 おんもは体<sup>からだ</sup>にわるいんだぞ。ここにいて坊とおあそびしろ。

千 あなた病<sup>びょうき</sup>気なの？

坊 おんもにいくと病気になるからここにいるんだ。

千 こんなとこにいた方が病気になるよ！…あのね、私のとても大切な人が大けがしてるの。だからすぐいかなきゃならないの。お願い、手を離して！

坊 いったらないちゃうぞ。坊がないたらすぐばあばがきておまえなんかころしちゃうぞ。こんな手すぐおっちゃうぞ。

千 うう痛い痛い！…ね、あとで戻<sup>もど</sup>ってきて遊<sup>あそ</sup>んであげるから。

坊 ダメ今あそぶの！

千 ううっ……

坊 …あ？

千 <sup>ち</sup>血！わかる？！血！

坊 …うわああ——あああああ———！

千 あっ！ハク———！

何すんの、あっち行って！しっしっ！ハク、ハクね！？しっかりして！

静かにして！ハク！？…あっ！

「湯バードにたかられる千。その隙に<sup>すき</sup> <sup>あたま</sup>頭たちがハクを落とそうとする。」

千 あっ、わっ…あっち行って！

あっ！だめっ！

「部屋から坊が出てくる。」

坊 んんっ…んんんっ…

血なんかへいきだぞ。あそばないとないちゃうぞ。

千 待って、ね、いい子だから！

坊 坊とあそばないとないちゃうぞ…うええ～～…

千 お願い、待って！

式神 …うるさいねえ。静かにしておくれ。

坊 ええ…？

式神 あんたはちょっと<sup>ふと</sup> <sup>す</sup>太り過ぎね。

ゆか <sup>ぜに</sup>一ば <sup>あら</sup>  
「床から銭婆が現われる。」

銭婆 やっぱりちょっと<sup>す</sup>透けるわねえ。

坊 ばあば…？

銭婆 やれやれ。お母さんとあたしの<sup>くべつ</sup> <sup>くべつ</sup>区別もつかないのかい。

「魔法でねずみにされる坊。」

ほう すこ うご  
銭婆 その方が少しは動きやすいだろ？  
さあてと…おまえたちは何がいいかな？

「湯バードはハエドリに、頭は坊にされる。」

千 あっ…

銭婆 ふふふふふふ、このことはナイショだよ。誰かに <sup>しゃべ</sup> 喋るとおまえの <sup>くち さ</sup> 口が裂けるからね。

千 あなたは誰？

銭婆 湯婆婆の <sup>ふたご</sup> 双子の <sup>あね</sup> 姉さ。おまえさんのおかげで <sup>けんぶつ</sup> ここを見物できて <sup>おもしろ</sup> 面白かったよ。さあそ  
<sup>りゅう</sup> の <sup>わたり</sup> 竜を渡しな。

千 ハクをどうするの？ひどいケガなの。

銭婆 そいつは <sup>いもうと</sup> 妹の <sup>てさき</sup> 手先の <sup>りゅう</sup> どろぼう <sup>だ</sup> 竜だよ。私の <sup>だいじ</sup> 所から <sup>ぬす</sup> 大事なハンコを盗みだした。

千 ハクがそんなことしっこない！ <sup>やさ</sup> 優しい <sup>ひと</sup> 人だもん！

銭婆 竜はみんな優しいよ… <sup>おろ</sup> 優しくて <sup>まほう</sup> 愚かだ。魔法の <sup>ちから</sup> 力を <sup>てい</sup> 手に入れようとして <sup>いもうと</sup> 妹の <sup>でし</sup> 弟子になるなんてね。

<sup>わかもの</sup> この <sup>よくぶか</sup> 若者は欲深な妹のいいなりだ。さあ、そこをどきな。どのみちこの竜はもう助からないよ。

<sup>まも</sup> ハンコには <sup>まじない</sup> 守りの呪いが <sup>ぬす</sup> 掛けてあるからね、盗んだものは <sup>し</sup> 死ぬようにと…

千 …いや！だめ！

<sup>いじ</sup> 「坊になった頭が坊ネズミとハエドリを虐めている。」

銭婆 <sup>れんちゅう</sup> なんだろね、この連中は。これおやめ、部屋にお戻りな。

白竜 グウ…！

<sup>すき</sup> 「隙をついて <sup>りゅう</sup> 竜の <sup>お</sup> 尾が <sup>しきかみ</sup> 式神を <sup>ひ</sup> 引き裂く。」

銭婆 <sup>ゆだん</sup> ！…ああら油断したねえ～…

はんどう  
「反動で落ちる竜と千、坊ネズミ、ハエドリ。」

千 ハク、あ、きゃああ——っ！  
ハク——っ！

「落ちていく中で水<sup>みず</sup>の幻<sup>げん</sup>影<sup>えい</sup>が浮<sup>う</sup>かぶ。」

「力を振り絞<sup>ふ</sup>って横<sup>しほ</sup>穴<sup>よこあな</sup>に入る竜。換<sup>はい</sup>気<sup>かん</sup>扇<sup>きせん</sup>を破<sup>やぶ</sup>ってボイラー室<sup>やぶ</sup>に出る。」

釜爺 なっ…わあっ！

千 ハク！

釜爺 なにごとじゃい！ああっ、待ちなさい！

千 ハクっ！<sup>くる</sup>苦<sup>くる</sup>しいの！？

釜爺 こりゃあ、いかん！

千 ハクしっかり！どうしよう、ハクが死んじゃう！

釜爺 体<sup>いのち</sup>の中<sup>く</sup>で何<sup>あ</sup>かが命<sup>あ</sup>を食<sup>あ</sup>い荒<sup>あ</sup>らしとる。

千 体の中？！

釜爺 強い魔法だ、わしにやあどうにもならん…

千 ハク、これ河の神様がくれたお団子<sup>き</sup>。効<sup>き</sup>くかもしれない、食<sup>き</sup>べて！

ハク、口を開けて！ハクお願い、食<sup>へいき</sup>べて！…ほら、平<sup>へいき</sup>気<sup>へいき</sup>だよ。

釜爺 そりゃあ、苦<sup>くだんご</sup>団<sup>くだんご</sup>子<sup>くだんご</sup>か？

千 あけてえっ…いい子だから…大丈夫。飲<sup>き</sup>み込んで！

白竜 グォウツ、グォツ…！

釜爺 <sup>で</sup>出<sup>で</sup>たっ、コイツだ！

千 あっ！

ハンコ！

釜爺 <sup>に</sup>逃<sup>に</sup>げた！あっちあっち、あっち！

千 あっ、あっ！あああああっ、あああああっ！

(ベチャッ！)

釜爺 えーんがちよ、せい！えーんがちよ！

き  
切<sup>き</sup>った！

千 おじさんこれ、湯<sup>ゆ</sup>婆<sup>ば</sup>婆<sup>ば</sup>のおねえさんのハンコなの！

釜爺 銭<sup>けい</sup>婆<sup>やく</sup>の？…魔<sup>けい</sup>女<sup>やく</sup>の契<sup>し</sup>約<sup>し</sup>印<sup>し</sup>か！そりゃあまた、えらいものを…

千 ああっ、やっぱりハクだ！おじさん、ハクよ！

釜爺 おお…お…

千 ハク！ハク、ハクーっ！

おじさん、ハク<sup>いき</sup>息してない！

釜爺 まだしとるがな。…魔法の<sup>きず</sup>傷は<sup>ゆだん</sup>油断できんが。

釜爺 …これで少しは<sup>お</sup>落ち着くといいんじゃが…

ハクはな、千と同じように<sup>とつぜん</sup>突 然ここにやってきてな。<sup>まほうつか</sup>魔法使いになりたいと言っておった。

ワシは<sup>はんたい</sup>反 対したんだ、<sup>でし</sup>魔法の弟子なんぞろくな事がないってな。聞かないんだよ。もう帰るところはないと、とうとう湯婆婆の弟子になっちまった。

そのうち<sup>かおいろ</sup>どんどん<sup>わる</sup>顔 色が<sup>め</sup>悪くなるし、<sup>め</sup>目つきばかりきつくなってな…

千 釜爺さん、私これ、湯婆婆のおねえさん<sup>かえ</sup>に返してくる。

返して、<sup>あやま</sup>謝 っ、ハクを助けてくれるよう頼んでみる。お姉さんの<sup>おし</sup>いるところを<sup>おし</sup>教えて。

釜爺 銭婆の所へか？あの<sup>こわ</sup>魔法は<sup>こわ</sup>怖 えーぞ。

千 お願い。ハクは私を助けてくれたの。

わたし、ハクを助けてたい。

釜爺 うーん…行くにはなあ、行けるだろうが、帰りがなあ…。待ちなさい。

たしか…どこに入れたか…

千 みんな、私の<sup>くつ</sup>靴と<sup>ふく</sup>服、お願いね。

リン 千！ずいぶんさがしたんだぞ！

千 リンさん。

リン ハクじゃん。…なんかあったのかここ。なんだそいつら？

千 <sup>あたら</sup>新 しい<sup>ともだち</sup>友 達なの。ねっ。

リン 湯婆婆が<sup>さが</sup>カンカンになっておまえのこと探してるぞ。

千 えっ？

リン <sup>きまえ</sup>気 前が<sup>ば</sup>いいと思ってた客が<sup>ば</sup>カオナシって化けもんだったんだよ。湯婆婆は千が引き入れたって言うんだ。

千 あっ…そうかもしれない。

リン ええっ！ほんとかよ！

千 だって、お客さんだと思ったから。



リン どうすんだよ、あいつもう三 <sup>さんにん</sup> 人も呑んじゃったんだぞ。

釜爺 あったこれだ！千あったぞ！

リン <sup>いまいそが</sup> じいさん今 忙 しいんだよ。

釜爺 これが使える。

リン <sup>でんしゃ きつぷ</sup> 電 車の切符じゃん、どこで手に入れたんだこんなの。

釜爺 <sup>つか のこ</sup> 四十年前の使 <sup>むっ め ぬま</sup> い残 <sup>そこ</sup> りじゃ。いいか、電車で六つ目の沼 <sup>えき</sup> の底という駅だ。

千 沼の底？

釜爺 とにかく六つ目だ。

千 六つ目ね。

釜爺 <sup>まちが</sup> 間 <sup>むかし もど</sup> 違 <sup>でんしゃ</sup> えるなよ。昔 <sup>ちかごろ</sup> は戻りの電 車があったんだが、近 頃は行きっぱなしだ。

それでも行くか千？

千 <sup>せんろ</sup> うん、帰りは線 路を歩いてくるからいい。

リン 湯婆婆はどうすんだよ？

千 これから行く。

ハク、きっと戻ってくるから、死んじゃだめだよ。

リン …何がどうしたの？

釜爺 <sup>あい</sup> わからんか。愛 <sup>だ、愛</sup> だ、愛。

湯女 きゃあああ——っ！ま、ますます大きくなってるよ！

湯女 <sup>く</sup> いやだ、あたい食われたくない！

湯女 来たよ！

父役 <sup>おさ</sup> 千か、よかった、湯婆婆様ではもう抑 <sup>えられんのだ</sup> えられるのだ。

湯婆婆 <sup>あば</sup> なにもそんなに暴 <sup>れなくても</sup> れなくても、千は来ますよ。

カオナシ 千はどこだ。千を出せ！

父役 <sup>いそ</sup> さ、急 <sup>げ</sup> げ。

湯婆婆様、千です。

湯婆婆 <sup>おそ</sup> 遅 <sup>い</sup> い！…お客さま、千が来ましたよ。ほんのちよっとお待ち下さいね。

何をぐずぐずしてたんだい！このままじゃ <sup>おおぞん</sup> 大 <sup>しぼ</sup> 損 <sup>しぼ</sup> だ、あいつをおだてて絞 <sup>れるだけ</sup> れるだけ金を絞 <sup>りだ</sup> りだせ…ん？

坊ネズミ チュー。

湯婆婆 なんだいその<sup>きたな</sup>汚いネズミは。

千 えっ、あのー、ご<sup>ぞん</sup>存じないんですか？

湯婆婆 知る<sup>し</sup>訳<sup>わけ</sup>ないだろ。おーいやだ。さ、いきな！…ごゆっくり。

父役 千ひとりで大丈夫でしょうか。

湯婆婆 おまえが<sup>か</sup>代わるかい？

父役 エっ？

湯婆婆 フン！

カオナシ これ、<sup>く</sup>食うか？うまいぞー。

金を出そうか？千の<sup>ほか</sup>他<sup>だ</sup>には出してやらないことにしたんだ。

こっちへおいで。千は何がほしいんだい？言ってごらん。

千 あなたはどこから来たの？私すぐ行かなきゃならないところがあるの。

カオナシ ウウツ…

千 あなたは来たところへ帰った方がいいよ。私がほしいものは、あなたにはぜったい出せない。

カオナシ グウ…

千 おうちはどこなのお父さんやお母さん、いるんでしょ？

カオナシ イヤダ…イヤダ…サビシイ…サビシイ…

千 おうちがわからないの？

カオナシ 千欲しい…<sup>ほ</sup>千欲しい…

欲しがれ。

千 私を食べる気？

カオナシ それ…取れ…

坊ネズミ チュウ！（ガブ）

カオナシ ケツ…

千 私を食べるなら、その前にこれを食べて。本当はお父さんとお母さんにあげたかったんだけど、あげるね。

カオナシ …ウツ！グハア…ゲホ、ゲホ…

セエン…<sup>こむすめ</sup>小娘<sup>く</sup>が、何を食わし…オグウ…

「カオナシが吐きながら千を追いかける。」

湯婆婆 みんなお<sup>ど</sup>退き！お客さまとて<sup>ゆる</sup>許せぬ！

カオナシ オグウ…！

湯婆婆 あらっ!?

千 こっちだよー! こっちー!

カオナシ グウウ…

に まわ は だ  
「逃げ 回 る千を追いかけるカオナシ。湯女と兄役を吐き出す。」

カオナシ グハアツ…! …ハアツ、ハアツ…許せん…

そと で りん たらいせん だ ま  
「外に出ると、リンが 盥 船 を出して待っている。」

リン セーーン! こっちだー!

千 こっーちだよー!

リン 呼んでどうすんだよ!

カオナシ あ、あ、…

千 あの<sup>ゆや</sup>人湯屋にいるからいけないの。あそこを出た<sup>ほう</sup>方がいいんだよ。

リン だってどこ連れてくんだよー!

千 わかんないけど。

リン わかんないって…! …あーあついてくんぞあいつ…

カオナシ …ごふっ!

「青蛙を吐き出すカオナシ。」

青蛙 ん?

リン こっから歩け。

千 うん。

リン 駅は行けば分かるって。

千 ありがとう。

リン 必ず戻って来いよ!

千 うん!

リン セーーン! おまえのことどんくさいって言ったけど、取り消すぞーー!

カオナシ! 千に何かしたら<sup>ゆる</sup>許さないからな!

千 あれだ！  
電車が来た。くるよっ。

千 <sup>ぬま</sup> あの、沼 <sup>そこ</sup> の底までお願いします。  
えっ？…あなたも乗りたいの？  
カオナシ あ、あ、…  
千 あの、この人もお願いします。

カオナシ あ、あ、…  
千 おいで。おとなしくしててね。

「ボイラー室で <sup>めざ</sup> 目覚めるハク。 <sup>ゆ</sup> 釜 <sup>お</sup> 爺を揺り起こす。」

ハク様 おじいさん。

釜爺 ん？んん…おおハク、<sup>き</sup> 気が付いた。  
ハク様 おじいさん、千はどこです。何があったのでしょうか、教えてください。

釜爺 おまえ、<sup>おぼ</sup> なにも覚えてないのか？

ハク様 <sup>ぎ</sup> …切れ切れにしか思い出せません。 <sup>やみ</sup> 闇の中で千尋が何度も私を呼びました、その声を頼りにもがいて…気が付いたらここに寝ていました。

釜爺 そうか、千尋か。あの子は千尋というのか。…いいなあ、<sup>あい</sup> 愛 <sup>ちから</sup> の力 <sup>だ</sup> だなあ…

「<sup>すがた</sup> ガウン <sup>だんろ</sup> 姿 で暖炉の前に座る湯婆婆。」

湯婆婆 これっばかりの金でどう埋め合わせするのさ。千のバカがせつかくのもうけをファイにしちまって！

青蛙 で、でも、千のおかげでおれたち助かったんです。

湯婆婆 おだまり！みんな自分でまいた <sup>たね</sup> 種 <sup>じゃ</sup> ないか。それなのに勝手に逃げ出したんだよ。

あの子は自分の <sup>おや</sup> 親 <sup>みす</sup> を見捨てたんだ！

おやぶた <sup>た</sup> 豚 <sup>ごろ</sup> は食べ頃 <sup>だ</sup> だろ、ベーコンにでもハムにでもしちまいな。

ハク様 お待ち下さい。

青蛙 ハク様！

湯婆婆 なあんだいおまえ。<sup>い</sup>生きてたのかい。

ハク様 まだ分かりませんか？<sup>たいせつ</sup>大<sup>か</sup>切<sup>か</sup>なものがすり替わったのに…

湯婆婆 ずいぶん<sup>なまいき</sup>生意気な口を利くね。いつからそんなに<sup>えら</sup>偉くなったんだい？  
フン…

ま さき たし あわ ひとみ み  
「真っ先に金を確かめる湯婆婆を哀れげな瞳で見るハク。」

ぼう め む じゅつ と あたま に  
「ふと坊に目を向け術を解くと、頭たちが逃げていく。」

湯婆婆 な…あ…あ…

きんかい つち か  
「金塊も土に代わる。」

湯婆婆 …ああ…きiiiiii—坊————！

つち  
青蛙 土くれだ！

湯婆婆 坊————！どこにいるの、坊————！

出てきておくれ、坊——！坊、坊！

…おおのおれえええ——！キイイイ——！

ああたしの坊をどこへやったあ——！

ハク様 銭婆のところですよ。

湯婆婆 銭婆…？…ああ…

湯婆婆 なるほどね。<sup>せいあくじょ</sup>性悪女め…それであたしに<sup>か</sup>勝ったつもりかい。

で！？どうすんだい！？

ぼう つ もど か りょうしん にんげん せかい もど  
ハク様 坊を連れ戻してきます。その代わりに、千と両親を人間の世界へ戻してやってください。

湯婆婆 それでおまえはどうなるんだい！？その後あたしに<sup>ご</sup>八つ<sup>やっ</sup>裂<sup>ざ</sup>きにされてもいいんかい！？

千 この駅でいいんだよね。…行こう。

つか も あ  
「疲れて坊ネズミを持ち上げられないハエドリ。坊ネズミが自分で歩き出す。」

かた の  
千 肩に乗っていいよ。

むし ある つづ  
「坊ネズミは無視して歩き続ける。」

いっぽんあし でんとう と いえ みちあんない  
「一本足の電灯が跳んできて、家まで道案内をする。」

銭婆 おはいいり。

千 失礼します。

銭婆 入るならさっさとお入り。

千 おいで。

銭婆 みんなよく来たね。

千 あっ、あのっ…！

すわ いま ちゃ い  
銭婆 まあお座り。今お茶を入れるからね。

ぬす かえ  
千 銭婆さん、これ、ハクが盗んだものです。お返しに来ました。

銭婆 おまえ、これがなんだか知ってるかい？

あやま  
千 いえ。でも、とっても大事なものだって。ハクの代わりに謝りに来ました。ごめんなさい！

銭婆 …おまえ、これを持ってて何ともなかったかい？

千 えっ？

まも まじない き  
銭婆 あれ？守りの呪いが消えてるね。

へん むし ふ  
千 …すいません。あのハンコに付いてた変な虫、あたしが踏みつぶしちゃいました！

あやつ  
銭婆 踏みつぶしたあ？…あっはははははは。あんたその虫はね、妹が弟子を操るために竜

はら しの こ  
の腹に忍び込ませた虫だよ。踏みつぶした…はっはははは…

さあお座り。おまえはカオナシだね。おまえもお座りな。

もと  
千 あっ、あの…この人たちを元に戻してあげてください。

銭婆 おや？あんたたち魔法はとっくに切れてるだろ。戻りたかったら戻りな。

(ぷるぷる)

いちにんまえ  
銭婆 あたしたち二人で一人前なのに気が合わなくてねえ。ほら、あの人ハイカラじゃないじゃない？

ふたご  
魔女の双子なんてやっかいの元ね。

おまえを助けてあげたいけど、あたしにはどうすることも出来ないよ。この世界の決まりだからね。  
両親のことも、ボーイフレンドの竜のことも、自分でやるしかない。

千 でも、あの、ヒントかなにかもらえませんか？ハクと私、ずっとまえに会ったことがあるみたいなんです。

ばなし はや いちど わす おも だ  
銭婆 じゃ話は早いよ。一度あったことは忘れないものさ…思い出せないだけで。

こんや てつだ  
ま、今夜は遅いからゆっくりしていきな。おまえたち手伝ってくれるかい？

まほう つく  
銭婆 ほれ、がんばって。そうそう、うまいじゃないか。ほんとに助かるよ。魔法で作ったんじゃ何にもならないからねえ。

にかいつづ  
そこをくぐらせて…そう、二回続けるんだ。

あいだ  
千 おばあちゃん、やっぱり帰る。…だって…こうしてる間にも、ハクが死んじゃうかもしれない。お父さんやお母さんが食べられちゃうかもしれない…。

かみど  
銭婆 まあ、もうちょっとお待ち。…さあ、できたよ。髪留めにお使い。

千 わあ…きれい。

つむ いと あ こ  
銭婆 お守り。みんなで紡いだ糸を編み込んであるからね。

千 ありがとう。

銭婆 いい時に来たね。お客さんだよ、出ておくれ。

千 はい。

千 ああっ…！ハク！

ハク、会いたかった…ケガは？もう大丈夫なの？よかったあ…

銭婆 ふふふ、グッドタイミングね。

千 おばあちゃん、ハク生きてた！

とが  
銭婆 白竜、あなたのしたことはもう咎めません。そのかわり、その子をしっかり守るんだよ。さあ坊やたち、お帰りの時間だよ。また遊びにおいで。

坊ネズミ ちゅう。

てだす  
銭婆 おまえはここにいな。あたしの手助けをしておくれ。

カオナシ あ、あ…

千 おばあちゃん！…ありがとう、私行くね。

と  
銭婆 だいじょうぶ。あんたならやり遂げるよ。

千 私の本当の名前は、千尋っていうんです。

銭婆 ちひろ。いい名だね。自分の名前を大事にね。

千 はい！

銭婆 さ、お行き。

千 うん！

おばあちゃん、ありがとう！さよなら！

りゅう の と た  
「竜に乗って飛び立つ千。」

きおく みず なが くつ  
「記憶がフラッシュバックする。水に流れていく靴。水に落ちるだれか…。」

千 …ハク、聞いて。お母さんから聞いたんで自分では覚えてなかったんだけど、私、小さいとき川に落ちたことがあるの。

その川はもうマンションになって、埋められちゃったんだって…。

おも だ こはくかわ  
でも、今思い出したの。その川の名は…その川はね、琥珀川。あなたの本当の名は、琥珀川…

しゅんかん はくりょう かがや うろこ は お  
「瞬間、白竜から輝く鱗が剥がれ落ち、ハクの姿になっていく。」

千 ああっ！

ハク様 千尋、ありがとう。私の本当の名は、ニギハヤミ コハクヌシだ。

千 ニギハヤミ…？

ハク様 ニギハヤミ、コハクヌシ。

千 すごい名前。神様みたい。

ハク様 私も思いました。千尋が私の中に落ちたときのこと。靴を拾おうとしたんだね。

こはく あさせ はこ うれ  
千 そう。琥珀が私を浅瀬に運んでくれたのね。嬉しい…

あさ あぶらや  
「朝。油屋の前で皆が待っている。」

リン 帰ってきた——！

みんな おおっ…

ぼう つ もど  
湯婆婆 坊は連れて戻ってきたんだろうね？…えっ？

坊 ばあば！

湯婆婆 坊——！



ケガはなかったかい！？ひどい目にあつたねえ！…坊！あなた一人で立てるようになったの？え？

ハク様 湯婆婆様、約束やくそくです！千尋と両親を人間の世界に戻してください！

湯婆婆 フン！そう簡単にはいかないよ、世の中には決まりきというものがあるんだ！

みんな ブー、ブー！

湯婆婆 うるさいよっ！

坊 ばあばのケチ。もうやめなよ。

湯婆婆 へっ？

坊 とても面白おもしろかったよ、坊。

湯婆婆 へえっ？でででもさあ、これは決まりなんだよ？じゃないと呪まじないとが解けないんだよ？

坊 千を泣なかしたらばあばきら嫌いになっちゃうからね。

湯婆婆 そ、そんな…

千 おばあちゃん！

湯婆婆 おばあちゃん？

千 今、そっちへ行きます。

千 おきておきて掟おきてのことはハクから聞きました。

湯婆婆 フン、いい覚悟だ。これはおまえの契約書けいやくしょだよ、こっちへおいで。…坊、すぐ終わるからねえ。

千 大丈夫よ。

湯婆婆 この中からおまえのお父さんとお母さんを見つけな。

チャンスは一回だ。ピタリと当てあられたらおまえたちじゆう自由だよ。

千 …？おばあちゃんだめ、ここにはお父さんもお母さんもないもん。

湯婆婆 いない！？それがおまえの答えこたかい？

千 ……うん！

「ボン！と破れ消える契約書けいやくしょ。」

湯婆婆 ヒッ！？

ぶた ば じゅうぎょういん 豚あに化けた従業員たち おお当たり——！

みんな やったあ！よっしゃ——！

千尋 みんなありがとう！

湯婆婆 行きな！おまえの勝<sup>か</sup>ちだ！早くいっちないな！

千尋 お世話になりました！

湯婆婆 フン！

千尋 さよなら！ありがとう！

千尋 ハク！

ハク様 行こう！

千尋 お父さんとお母さんは！？

ハク様 さき<sup>さき</sup> 先<sup>さき</sup>に行ってる！

千尋 水がない…

ハク様 私はこの先には行けない。千尋は元<sup>もと</sup>来<sup>き</sup>た道<sup>みち</sup>をたどればいいんだ。でも決<sup>けつ</sup>して振り向<sup>ふ</sup>い  
ちやいけないよ、トンネルを出るまではね。

千尋 ハクは？ハクはどうするの？

ハク様 私は湯婆婆と話をつけて弟子をやめる。平<sup>へい</sup>気<sup>き</sup>さ、ほんとの名<sup>な</sup>を取り戻<sup>もど</sup>したから。  
元の世界に私も戻るよ。

千尋 またどこかで会える？

ハク様 うん、きっと。

千尋 きっとよ。

ハク様 きっと。

さあ行きな。振り向かないで。

むす て なごりざんお はな  
「結<sup>むす</sup>んだ手が名<sup>な</sup>残<sup>ごり</sup>惜<sup>ざん</sup>しそうに離<sup>はな</sup>れる。」

もん い ぐち  
「門<sup>もん</sup>の入り口<sup>いぐち</sup>で、父<sup>ちち</sup>と母<sup>はは</sup>が待<sup>まち</sup>っている。」

母 千尋一。なにしてんの、はやく来なさい！

千尋 ああっ…！

お母さん、お父さん！

母 だめじゃない、急<sup>きゆう</sup>にいななくなっちゃ。

父 行くよ。

千尋 お母さん、何ともないの？

母 ん？引越<sup>ひっこ</sup>しのトラック、もう着<sup>つ</sup>いちやってるわよ。

ふ む  
「振り向こうとして、とどまる千尋。」

父 千尋一。早くおいで一。

あしもとき  
足 下気をつけな。

母 千尋、そんなにくっつかないでよ。歩きにくいわ。

でぐち  
父 出口だよ。…あれ？

母 なあに？

父 すげー…あっ、中もほこりだらけだ。

母 いたずら？

父 かなあ？

母 だからやだっっていったのよー…

母 オーライオーライ、平気よ。

父 千尋、行くよ一。

母 千尋！早くしなさい！

む み め ひるがえ かみ まも ひか  
「トンネルの向こうを見つめる目を、 翻す千尋の髪にあのお守りが光っていた。」

おわり